

平成 21 年度「専修学校教育重点支援プラン」成果報告書

事業名	学生の脳を活性化し、やる気を引き出す「脳力開発指導」の導入と実践		
法人名	学校法人片柳学園		
学校名	日本工学院八王子専門学校		
代表者	理事長 片柳 鴻	担当者 連絡先	佐藤 和彦 042-637-3111
1. 事業の概要			
<p>私どもの事業では、「現代の学生の学習能力が低下しているのは、様々なプレッシャーやストレスにより集中力を欠いているからである。」という仮説を基に以下のことを行った。</p> <p>(1)教材を開発するための基礎資料として学生の基礎学力や学習意欲を把握するための調査を行うこと。</p> <p>(2)教員が学生の感じるプレッシャーやストレスに関する知識を得ることおよび簡単なメンタルトレーニングや脳力開発トレーニングが出来るような教材を開発すること。</p> <p>(3)学生自身が集中力を高めるためのメカニズムを知識として理解することおよび具体的なドリルを開発し実践すること。</p> <p>(4)上記 2 および 3 で開発した教材等を精査し、専門学校全体に普及すること。</p>			
2. 事業の実施に関する項目			
①開発したプログラム・教材・教育手法等の概要			
<p>■学生のやる気を引き出す『メンタルトレーニング』 指導者向けマニュアル この指導書は、日常の授業で学生にメンタルトレーニングを指導するうえで必要な理論と実践の情報を提供することを目的として開発した。</p> <p>■学生の脳を活性化する『脳力開発トレーニング』 指導者向けマニュアル この指導書は、脳力開発トレーニングとしてのビジョントレーニングの理論と実践方法を理解することを目的として開発した。 また、集中力や計算力、認識力、ひらめき力を高める脳活トレーニングならびに脳力開発トレーニングドリルの使用法もここで解説することにした。</p> <p>■脳力開発トレーニングドリル&CD-ROM エゴグラム、ナンバータッチ、100マス計算等の具体的なドリルを約 100 種類開発した。 また、コピーを取り何度でも繰り返し練習することが出来るように、ドリルの内容を CD-ROM 取り込み配布することにした。</p>			

②ニーズ調査等（手法・期間・効果）

学生の学習意欲、基礎学力、コミュニケーション力等について教員がどの様に感じているかを把握するために「学生の基礎学力に関するニーズ調査、実態調査アンケート調査」を実施した。

結果は、「3. 事業の評価に関する項目 ②事業の成果」を参照。

(1)対象は学校法人率専門学校を中心に1639校。

(2)回収は304校で18.5%の回収率。

③実証講座の状況

■教員向けメンタルトレーニング・脳力開発トレーニング研修

専修学校教員にメンタルトレーニング・脳力開発トレーニングを正しく理解して頂くことおよび開発教材の有効性を検証することを目的として研修会を開催した。

(1)日程：平成22年2月5日

(2)場所：東京・コロネットブルールーム

(3)参加者：19人。

(4)結果：1. 開発教材全てにおいて90%程度の教員が有効であると感じた。

2. 今後、各学校で取り組みたいと答えた教員が約70%であった。

3. ドリルをもっと増やして欲しいと具体的な要望があった。

4. 研修満足度は100%。

■学生向けサンプリング研修

開発した教材を基に本校学生および本校の姉妹校である日本工学院専門学校において教材の検証的な検証を実施した。

●日本工学院専門学校（3回実施）

(1)日時：平成22年1月20日10:00～12:00 建築設計科、13:00～15:00 ITカレッジ

(2)対象：建築設計科1年生55名、パソコン・ネットワーク科1年生27名、ITスペシャリスト科1年生6名

(1)日時：平成22年1月30日10:00～12:00 ITカレッジ、13:00～15:00 建築設計科

(2)対象：建築設計科1年生52名、パソコン・ネットワーク科1年生25名、ITスペシャリスト科1年生5名

(1)日時：平成22年2月15日10:00～11:00 ITカレッジ、11:00～12:00 建築設計科

(2)講師：本校担当者により実施

(3)対象：建築設計科1年生50名、パソコン・ネットワーク科1年生25名、ITスペシャリスト科1年生6名

●日本工学院八王子専門学校（2回実施）

(1)日時：平成22年2月16日・17日 各クラス40分で実施

(2)講師：本校担当者により実施

(3)対象：情報学科1年生4クラス155名、情報ビジネス科1年生1クラス45名、パソコン・ネットワーク科1クラス48名

④その他
3. 事業の評価に関する項目
①目的・重点事項の達成状況
<p>教員向けの教材開発やドリルに品揃えなどについては、ほぼ想定通り達成できたと考え る。</p> <p>しかしながら、本年度の1月からの学校への導入と言うこともあり、学生の変化を計測 するまでには至らなかった。今後は、この教材を継続的に利用し学生の変化を記録・分析 し学生の成長や知的能力との因果関係を明確化していきたい。</p>
②事業の成果
<p>(1) 学生の基礎学力の低下は深刻な問題であり、入学時点で専門知識を学ぶだけの知識を 有していない。</p> <p>(2) 医療・介護系の学生の学習意欲は過去の学生とあまり大きな変化はないが工業・商業 実務・文化教養は過去の学生より意欲が少ない。</p> <p>(3) 上記1および2は、ほとんどの学校が対策を取っているが、めざましい成果は得られ ない。</p> <p>(4) コミュニケーションや助け合う力が低下していることをほとんどの学校が理解し対策 しているがめざましい成果は得られていない。</p> <p>(5) 考える力や積極性が低下していることをほとんどの学校が理解をしているが対策の仕 方が分からない。</p> <p>(6) メンタルヘルスや脳の活性化を知識として理解している教員は、比較的少なく本事業 で開発した教材は有効である。</p> <p>(7) ドリルは授業に集中するために効果的であると学生は感じた。</p> <p>(8) 本事業で開発した教材を有効に利用し学生の心理や教授法を学ぶことは、今後の専門 学校教員にとって必要である。</p>
③次年度以降における課題・展開
<p>(1) 次年度以降もこの教材を継続的に利用し、学生の変化を記録・分析し、学生の基礎学 力の向上、学習意欲の向上、コミュニケーション能力向上等との因果関係を明確化し ていきたい。</p> <p>(2) 本年度開発した教材の殆どが机上で行う脳の活性化練習教材であった。次年度以降は 机上の教材のみならずストレッチや簡単な運動を取り入れた教材の開発に着手した い。</p> <p>(3) 本教材を利用し講師の役割が果たせる教員は、数限られた人員でしかないと考える。 本校の中でもまた全国の専門学校教員にもこの教材を利用しより円滑な教育指導が出 来るように普及に努めていきたい。</p>

④成果の普及

本事業の成果は、全国専門学校情報教育協会が主催する「専修学校フォーラム 2010」において、成果報告を実施した。

日 程：平成 22 年 2 月 24 日

会 場：中野サンプラザ

対 象：専門学校関係者

参加数：187 名

本事業の成果物は、1625 校の学校法人率専門学校へ配布し、その普及に努めた。

事業に参画した専門学校は全ての学校が平成 22 年度から脳力開発やメンタルトレーニングを開始する。

また、全国専門学校情報教育協会等の協力のもと、本教材を成果の普及と活用を検討したい。